

2014 年度私立大学図書館協会東地区部会
館長会 会議録

日 時 : 2014 年 6 月 14 日 (土) 12 : 20 ~ 13 : 35
場 所 : 成蹊大学 10 号館 12 階ホール
テーマ : 図書館における学修支援と利用者教育
司 会 : 東地区部会長校 明治大学図書館長 金子 邦彦
出席者 : 図書館長 64 名

議 事

1 司会者挨拶 (明治大学図書館長 金子 邦彦)

司会の金子邦彦明治大学図書館長より開会の挨拶があった。

2 テーマ趣旨説明 (明治大学図書館長 金子 邦彦)

本日の館長会のテーマは「図書館における学修支援と利用者教育」である。

2010 年 12 月に「大学図書館の整備についてー変革する大学にあって求められる大学図書館像ー」が、科学技術・学術審議会 学術情報基盤作業部会より、審議のまとめとして発表された。この中では、大学における教育に関しては、学生は授業を受けるだけでなく、より自発的な学習、アクティブ・ラーニングの実践の必要性が重視され、大学図書館にもその支援の「場」の提供や図書館職員等による学習支援が期待されている。

また、2012 年 8 月に中央教育審議会から「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けてー生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へー」という答申が出された。この中では、学生の学修を支える環境をさらに整備する必要がある、主体的な学修を支える図書館の充実が求められている。本日は「図書館における学修支援と利用者教育」について考えていきたいと思う。

3 会長校挨拶 (立命館大学図書館長 平野 仁彦)

大学図書館に求められる役割として学修支援が挙げられる。アクティブ・ラーニングが持つ意味合いはさまざまである。アクティブ・ラーニングにとって重要なことは、学生のコミュニケーション能力、交渉力、さらに協働して問題を発見し解決していく力をもつ、「足腰」しっかりした逞しい学生を育てることにある。本日は活発な議論を期待している。

4 会場校挨拶 (成蹊大学図書館長 宮本 光雄)

総会会場校としての任務がどれだけ果たせたか気になる次第である。学修支援について活発に議論していただきたい。

5 意見交換

A 大学

16 年前に図書館と情報システム部門が一緒になり、現在の情報・メディアセンターとなった。

今年ラーニング・コモンズを品川キャンパスの図書館の中に作った。図書館では、情報検索、機器の使い方などの講習会を実施している。参加した学生からの反響が良い。授業の時間を使っての講習などもある。ラーニング・コモンズにおける学修支援については、大学院生を活用した構想を抱いている。大学院生が学生に教えるという「教えるキャリア」を育てていきたい。大学には学生のための学修支援室はなく、教員のための授業支援室、研究支援室はある。今後大学院生を学修支援の基盤にしたい。図書館が大学の顔として、情報センターから独立させたいと考えている。

B 大学

アクティブ・ラーニング・スペースとしてグループ学習室を設置している。また昨年度同フロアの一部を固定閲覧席から移動可能な机・椅子に変更したが活用が低い。同時に図書館階下の学生ロビーも同様に固定から移動机・椅子に変更したが、ここは自由さが受けグループでよく使われている。並んで席を待つ学生たちもいる。

30年前の学生と違い本離れの傾向がある上に、最近は電子媒体が発達し、図書館に行く機会が少ない。共同学修スペースとしての利活用に期待するところ大である。図書館が多くの学生に利用してもらうべく、学生の求めに応えられるようにするのが好ましい。今回さらに館長室を時間限定で開放、ライブラリーサポートルームを設置した。しかし主体性に任せていては、学生は図書館に足が向かないので何らかの仕掛け、戦略が今後必要であると検討中である。

C 大学

本学池袋キャンパスは、1年半前に新しい図書館を作った。ラーニング・コモンズ、グループ学習室などのスペースを用意し、予想以上に使われている。移動可能な机・椅子、ホワイトボードの他に、貸出用PCも用意している。

利用の状況を見ると、学生は授業で課題が出ると、グループで作業を行うようである。教員から学生に図書館の施設を利用するよう働きかけることは重要である。また図書館側から、ラーニング・コモンズの利用などを積極的に教員へ働きかけることも重要ではないだろうか。

D 大学

本学は、昨年度白山キャンパスにラーニング・コモンズを設置し、年間で約20万人の利用者が増加した。朝霞キャンパスは、ラーニング・コモンズを含めた改装を今年度実施する。今後他のキャンパスに波及させる予定である。

教員側から図書館の多様な利用を働きかけることは重要であり、図書館をより多く利用するようお願いをしているが、教員が直ちに行動する状況には至っていない。

昨年度より図書館の新企画として、「English Tips」を開始した。これは白山図書館のラーニング・コモンズにおいて留学生とコミュニケーションを取る機会を設け、図書館での英語学修に親しんでもらう企画である。今年度は年間で8回の開催を予定している。今年度の第1回目は約70名の学生が集まった。図書館のスペースを生かした学修支援を積極的に行っていききたい。効果が上がっているので、各キャンパスに波及させていきたい。

C 大学

学部 1 年生対象の検索講習会などを、基礎演習、基礎科目の授業の中で行っている。また情報検索講習会や図書館活用講座などを実施し利用支援を行っている。その他、「ラーニングアドバイザー」という人員を配置してレポートのサポートなどを行っている。大学院生が質問に来た学生にアドバイスを与えているが、院生の専門以外のいろいろな質問に対応している。

今後、図書館での学修支援を進めるにあたって、学部に関心することは重要であると考えている。1 年生向けの検索講習会を実施しているが、実施していない学部・学科があり、そのような際には図書館から学部に関心を持っていくようにしている。図書館と学部との協力・連携は非常に重要である。

E 大学

今年秋学期 Semester で、横浜キャンパスの図書館を改修する。1 階にラーニング・コモンズを設置し、グループ学修ができるようにする。

導入教育・初年次教育として、現在、図書館利用ガイダンスとして、デジタル化したものを HP で公開し、図書館員が講習会を開催している。大学院生がカウンターに座って学生からの質問に答える体制をとっているが、学生からやってくることは少ない。

最初に、A 大学が情報メディアセンターを、情報センターと図書館とに独立させる話が出たが、本学は情報センターと図書館は別組織であるが、センター長と図書館長を兼務している。別組織であるが機能はできる限り垣根を感じていない形で運用している。

先ほど本離れの話が出たが、本学では英語だけのクラスの学生に iPad を 40 台用意し、英語の教材を用意し活用している。事前学修、事後学修を行っている。英語の教材は充実しているが、日本語のコンテンツは少ない。デジタル資料を読んでいるので、紙媒体のもののみを指して、本離れと言えるのだろうか。今後は電子図書などを教材としてどのように活用できるのか大きな問題である。

F 大学

3 人の副学長のうち研究・情報担当の副学長が図書館長を兼ねることになっている。

本学図書館は蔵書数約 38 万冊で、専任職員が 3 名いる。レファレンス等は業務委託を行っている。3 つのグループ閲覧室をラーニング・コモンズとして位置づけており、予約して借りることができる。教員がここでゼミを行うこともある。部屋にはホワイトボード、PC が用意されている。本学では、グループで学修させるための課題を課す教員が多いなどの理由で、授業の空き時間にグループで学修している学生の姿をよく見かける。大学のラウンジや食堂など様々な場所を使っている。学生は自分たちにとって使いやすい場所で学修をしている。ラーニング・コモンズは図書館に限らず、学生の利便性の良い場所にあっても良いと考える。要は、学生にとって自主学修がしやすいところであればよい。場所は大学全体で考えるべきであろう。図書館のラーニング・コモンズは、たとえば書籍が多くあるなどの図書館の特徴を活かしたものを作るべきであろう。また、学生の中には、一人で学修することが好きなものがあるため、そのような部屋も確保する必要がある。学生の勉強法は多様であり、それらを尊重すべきである。図書館のガイダンスは、新入生向け、OPAC 検索講習会、または授業の一環として行うガイダンス

スや図書館主催の各種ガイダンスを開催している。

学生は本を読まなくなったと思う。授業に直結した参考書は電子書籍でも構わない。しかし、ぜひ読み物の読書をしてもらいたい。普段から読書をする学生は視野が広いと感じている。

G大学

昨年秋、図書館とは別の建物にラーニング・コモンズを作った。全部で 350 席ある。そのうち 50 席は静かに勉強する部屋、50 席の語学学修専門の部屋などがある。残り 250 席では学生は活発にグループ学修をできるスペースを設けた。レポートの書き方の相談などを受け付けるカウンターを設け、助教、院生を配置している。

図書館の 1F にも 100 席のラーニング・コモンズを設けている。ここでは BGM を流している。3 つの区切ったエリアには持ち込み PC 投影用のプロジェクタ等も設置している。ここは 1 年間で約 900 回利用され、約 4,400 名の学生が利用した。院生を TA として雇い、学生からの質問に答えられるようにしている。

図書館外にあるラーニング・コモンズには司書 1 名を派遣している。新入生約 1,800 名がいて、基礎演習が必須となっていて、15 名程の少人数の演習を行う。4、5 月には利用者教育として、8 学部の 1 年生全員に図書館ガイダンスを実施している。この他、OPAC 検索講習会、DB 利用講習会、資料収集講習会、書庫利用講習会やオンデマンドの講習会を実施している。

H大学

学修支援としては、比較的成績が優秀で教員から推薦をもらった学生スタッフを支援要員として配置している。学生スタッフは「Ask me」のプレートを付けていて、質問がある学生が声をかけやすくしている。この他、「ライティング・アドバイザー」がいるが、アカデミックライティングを専門とする、大学が契約をした専門家を呼んでいる。

学生の図書館利用を促進するために、教員は演習において、学生を 2 名のペアにして、プレゼンテーションするための参考文献を作らせて、リストを作成したら図書館に行かせ、検索をして本学図書館にあるかどうか確認させている。その後、プレゼンテーションの準備やレポートの書き方についてライティング・アドバイザーの指導を受けるように勧めている。

明治大学図書館長 金子 邦彦

ラーニング・コモンズ、アクティブ・ラーニングの概念はまだはっきりとしていない。今回各大学でのよい取り組みが紹介されたと思う。今後は学部、教員と図書館との協力をいかにうまくやっていくことが重要だと思われる。学生が主体的に課題に取り組むかどうか、最終的なアクティブ・ラーニングの取り組みがうまくいったかどうかの判断基準となると思う。学生が主体的に、主導的に課題に取り組むために、ラーニング・コモンズ、アクティブ・ラーニングをツールとして活用し、各図書館において今後様々な活動を活発に行っていただきたいと思う。昨年度の館長会のテーマ「学術雑誌の価格高騰問題と予算編成について」だったが、明治大学の取り組みについて最後に報告したいと思う。

明治大学図書館総務事務長 菊池 亮一

明治大学は、昨年度 Elsevier 社の契約方式の見直しを行い、結果的にそれまでのビッグディール契約を破棄した。約 2,400 タイトルの雑誌の購読を停止し、論文買い、つまり PPV (Pay Per View) 方式にした。どれだけの予算削減になったかより、ビッグディールによる契約継続の縛りをなくし、購読誌の取捨選択の自由を手に入れた意義は大きい。教員、院生から反対の声が上がったが、広報等で理解を得た。図書館本来の資料保存・管理・提供という機能も無視できないが、限られた予算をいかに効率的に使うかが重要であると考えている。

(終 了)